

佐藤愛子

老兵は死なず



読売新聞社

佐藤愛子

老兵は死なず



読売新聞社

老兵は死なず——一〇〇〇円

著者——佐藤愛子さとうあいこ

編集人——谷亀利一

発行人——堀内 稔

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一

大阪市北区野崎町八の十

北九州市小倉北区明和町一の十一

〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所——共同印刷

製本所——堅省堂

第一刷——昭和六十年十二月七日

© 佐藤愛子 昭和六十年
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN4-643-74200-3 C0093 ¥1000E

Printed in Japan

老兵は死なず

目次

般若心経……………	7
悪口のいい方……………	18
映画の見方……………	28
幻の下宿のおばさん……………	37
インテリ無知……………	48
負けました……………	57
こんな女に誰がした……………	67
幸福の形……………	78
朗らかな異星人……………	87
エライ人考……………	96
理解について……………	105
老兵は消えて行く……………	114

目	次	
異星の人……	213	
今、なぜタコか……	207	
疑惑時代……	202	
悲劇のみなもと……	196	
現代若者考……	190	
解説に金メダルを……	184	
焼酎戦争……	178	
顔面紅潮……	172	
一億一心火の玉……	167	
犬たちの春……	146	
電話のない日……	135	
南無大聖不動明王……	124	

装丁・村上豊

老兵は死なず

般若心經

「困った世の中になりました」

昨今、人が寄るときまってそんな言葉が出ている。教師が生徒を刺したり、中学生が親や教師に乱暴を働く事件がたてつづけに起っているからである。

「いったい、どうすればいいとお思ひになりますか？」

といわれても、

「さあ……」

というばかりで、誰もほかばかしく答えられない。しかし、「なぜ、こんな事態になったか」という話になると、忽ち八方から意見が出て来るのである。分析は出来るが、分析は解答にはならないのである。

「むつかしいですねえ。ここまで来てしまつては」

「タイムカプセルで三十年前に戻つて、そこからやり直すしかありませんねえ」

と嘆息して終つてしまふ。

「世の中の価値観が精神性からモノへと移つてしまった、そもそもそこに問題があるんです」といった人は、

「では、その価値観を戻すにはどうすればいいんでしょう？」

と質問されるとグツと詰り、

「うーん、だから……タイムカプセルで」

ということになつてしまふ。

「戦後、父親が家長たる自負を捨ててだらしくなりました。父親は単に子供を養う働き蜂であつて、人生の何たるかを教える存在ではなくなりました。父親は子供から尊敬されていません。教師と同様です。そこに既にこうした事態を招来する萌芽があつたんです」

といい出した人も、

「ではどうすれば尊敬されるでしょう？」

と素朴に訊かれると思わずたじろぎ、

「つまりですよ、例えば父親として、男とはいかに生きるべきかというようなことを息子に語

り聞かせるとか、あるいは実践してみせるとか……自分が理想とする偉人の話をするとか、己れの主義、理想、体験、人生哲学などを語って聞かせるのもよいでしょうね」

と述べてはみるものの、そういうお前はどんな主義、理想を語っているのかとひそかに自問して、忸怩たるものを覚えていた。すると、

「それはなかなかいい意見です」

と簡単に感銘を受けた人がいて、また素朴な質問をする。

「しかし私は主義とか理想とかべつにないんでしてね。そういう場合はどうすればいいんでしょう？ とにかくいろいろと忙しくてね。マイホームは建てなきゃならないし、子供を大学へ行かせる金は貯めなきゃならないし、何しろ、クルマのローンがあなた……」

と女房連中の買物帰りの会話と同じようなことをいう。

「それぞれ、それがイカンのです。そういうことは男たるものが口にする話題ではないんです。そういう自覚をまず持たなければ」

「そうですか。しかし、人生を語れということになると、こういうことになるんでして」

「いやそれは人生ではなく現実でしょう？ つまりね、人生を語るということは、あなたの現実から抽出したものを語るといふことなのですが」

といいかけたが、もうそれ以上しゃべるのを断念し、

「どうしようもないですな、ここまで来ては」

——タイムカプセルで……となる。

と、別の人、

「私は母親教育をやり直さなければ、と思うんです。この間、ある町でミドリのおばさんが急病で休んだんです。それで横断歩道で旗を振る人がいなかった。すると忽ち小学生が車に跳ね飛ばされるという事件が起きたんです。と、その子供の母親が怒って教育委員会を訴えるという。ミドリのおばさんがいないからうちの子供は怪我をした。その責任をとれといってね」

「そんなこと！ ミドリのおばさんがいなければ横断歩道を渡れないなんて、それじゃあこの世の中、生きていけませんよ！」

「しかしこれは特殊の例じゃありませんよ。こういう話はいっぱいあります。今に子供が木に登って落ちたのは、こんな所に登りたくなるような枝ぶりの木があるのがイカンのだといわれて、木の持主は告訴されることになりかねません」

「とにかく母親の自覚が先決ですよ」

「今の子供は作られるべくして作られた子供たちですよ。何でもかでもひとのせいにすることを母親から教えられるのですから」

「ではその母親たちを、どうして自覚させますか」

「うーん……」

「むつかしいですなあ」

「もうここまで来ては……」

またしてもタイムカプセルで……だ。

「だいたい、学校の校長が教育をどう考えているのかさっぱりわかりません。小学校の給食の先割れスプーンの問題にしても、先割れスプーンを使わせているために、子供は犬喰いをするようになった、といって困ってるんですな。それなら箸を使わせればいいじゃないか。なぜ箸を使わせないかといいますと、割箸を使い捨てにしていると金がかかってたまらないということです。なら各自に箸を持って来させればいいじゃないかという、持って来るのを忘れた子はどうなるか、というんですね。忘れた子は食べなければいいんです、というで大騒ぎになります。それならめいめいがロッカーなり机の中なりに置き箸を持っていることにしたらどうでしょうという、それでは不潔になる。食べた後、洗わないでしまっておいたために、腐敗菌がついて伝染病のもとになったりしたら困るといいます。食べた箸を洗わせる、その習慣をつかさせるのが教育というもんじゃないですか。そんなことすらも考えようとしなない怠けものの教師なんですから、子供の教育なんか望む方が無理なんです……」

と、文句、批判、悪口ならば、次から次へと果しなく出て来るのである。

「ではそういう教師を本来あるべき教育者の姿に戻すにはどうすれば」

といいかけて口を嚙む。タイムカプセルはもういい飽きた、聞き飽きた。

その数日後のテレビに、生徒刺傷事件があった中学校の、朝の登校風景が写し出された。校門の両側に数人の教師が並んでいて、登校をして来る生徒に向って、

「おはよう」

「おはよう」

口々に声をかけているのである。

生徒の方はテレビカメラを意識してか、薄い笑いを口許に浮かべ、頭を下げてコソコソと通り過ぎて行く。

多分、生徒は皆、困っているのである。こんなとってつけたような、シラジラしいことをなせしてくれるのだろうと、腹立たしく、情けなく、恥かしさでいっぱいになっているのにちがない。今の子供はそれほど単純素朴ではないのである。

しかし先生の方はそんな生徒の気持を知ってか知らずか、いや、わかつてはいても、とにかくにも何かしなければならぬという責務感に駆られてのことなのであろうか、

「おはよう……」

「今日も元気だな」

と声をかけつづける。そうすることにどれほどの効果があるのか、おそらくは誰も信じてはいないのであろうが、ともかく、それはひとつの姿勢を示していることにはなるのだ。

ほかに何の案もなければ、それでもするよりしようがないのだ。とりあえず、急いで姿勢を示さなければ、「世間」がうるさいのである。いったい学校は何をやってる、これほどの事件を起したというのに、まだ何の対策も考えておらん、などとすぐに文句をいう手がが舞っているのだ。この本質までじっくり考えて方策を練るには時間がかかる（それを熟考するアタマがないとはあえていわないが）。世間がこううるさいと、とるもとりのあえず上へのとり繕いをするしなければならぬ。その思いに流されて、お茶を濁して切り抜けることばかりしているうちに、それが癖になって本質に迫ることをやめてしまうのである。

学校側としてもいいたいことがあるだろうが、なぜかそれをいわない。ひたすら恐縮反省するばかりで、父母への注文は出さない。そんなことをしようものなら、何とやってとつちめられるか、わかっているからであろう。両者が平等の立場で討議しないで、どうして良い方策が生れようか。

新聞によるとこの中学校では急遽PTA総会が開かれて、四つの項目が決議されたという。
一、マンモス化した学区内に新設校を建設する。

二、授業参観の機会を多くする。

三、地域内で一声運動を展開する。

四、刺傷教師の減刑嘆願署名運動を起す。

何という哀れな決議だろう。いったい一声運動で生徒の荒れた心を鎮めることが出来ると、本気で考えてのことだろうか。

父母が授業を参観するということは、父母を警邏係にするつもりなのか。それとも教師の立場のどうにもならなさ、その辛さを見学してもらうという目的であろうか。それらの決議を生徒たちがどう感じるかを、想像し考えた上でのことなのだろうか。

その後、一声運動を実践しようとしたお母さんが、学校周辺を見廻っていたところ、タバコを吸いながらブラブラ歩いている女子中学生を見つけた。そこで早速、

「早くお家へ帰りましょうね」

ここぞと優しい声をかけたところ、

「うるせえな、いつ帰ろうとひとの勝手だろ！」

忽ちやられてガックリ来たという。

いわないこっちゃない、だから一声運動なんて無意味なんだ。コケにされ、反発されるが関の山なんだ……とその話を聞いた私は思わず我が意を得たり、という気持ちになったが、